

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：12606

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26770066

研究課題名(和文) 浮世絵における西洋陰影法の消去に関する基礎研究

研究課題名(英文) A Study on Ukiyo-e and Its Elimination of Shading Techniques Introduced from the West

研究代表者

松浦 昇 (Matsuura, Noboru)

東京藝術大学・その他の研究科・非常勤講師

研究者番号：80640010

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究「浮世絵における西洋陰影法の消去に関する基礎研究」は、江戸中期～後期を中心にした浮世絵の一次資料調査および文献調査を通じて、絵師による西洋陰影法の利用と、その背景にある日本固有の観察方法や陰影概念を明らかにすることが目的である。調査によって、浮世絵における西洋陰影表現は眼鏡絵や洋風版画の影響を受け、葛飾北斎以降江戸の実景とともに使用されていることが明らかになった。また歌川国芳を中心に、西洋陰影表現は月影と影法師との関係として再解釈されていたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Through in-depth research on original resources and documents about Ukiyo-e from the middle to latter of the Edo period, this research < A Study on Ukiyo-e and Its Elimination of Shading Techniques Introduced from the West> aimed to prove the fact that painters used shading techniques introduced from the West as well as techniques of observation and notions of shadow originated in Japan. The result of the research found out that these shading techniques in Ukiyo-e were influenced by Megane-e (Eyeglass picture) or Western prints and adopted into real landscape painting of the Edo period since Katsushika Hokusai's works. Also it has been clarified that shading techniques imported from the West were re-interpreted as a relation between moonlight and silhouette by painters with Utagawa Kuniyoshi as the central figure.

研究分野：映像メディア学

キーワード：浮世絵 陰影法

1. 研究開始当初の背景

日本を代表する固有の文化の一つとして知られる浮世絵だが、錦絵の始祖である鈴木春信以来、幾度も西洋画を参考にした例が見られる。浮世絵を描いている絵師達は西洋画に驚きつつも、しかし大きくは影響されず独自の技法を生み出している。浮世絵師達は一体どのような思想を持ちユニークな浮世絵の描画技法を開拓していったのだろうか。

この観点から浮世絵を眺める際に最も注目すべきなのが西洋遠近法と西洋陰影法の扱いである。西洋画の基礎とも言うべきこの二つの技法は現在の絵画表現・映像表現の基礎にもなり、観察の原理として浸透している。現代の日本人から見て浮世絵の人物表現や空間表現が独特に映るのは、日本人の観察方法が完全に西洋画の規則に塗り替えられてしまったことに起因している。

浮世絵と西洋版画との関係については、成瀬不二雄『江戸時代洋風画史 桃山時代から幕末まで』中央公論美術出版 (2002)や、勝盛典子『近世異国趣味美術の史的研究』臨川書店 (2011)等のなかで、書画における西洋画法との関係とともに浮世絵についても言及がある。浮世絵と西洋遠近法については岸文和『江戸の遠近法 浮絵の視覚』勁草書房 (1994)や横地清『遠近法で見る浮世絵 政信・応挙から江漢・広重まで』三省堂 (1995)等の研究がある。また、浮世絵と陰影法については、岡戸敏幸「「影」と肖像」『日本の美学』第21号 (1994)、安永幸史「幕末浮世絵における西洋版画の受容について：歌川国芳を中心に」『海港都市研究』第4号 (2009)、中山創太『歌川国芳研究 - 19世紀浮世絵における文化交渉のかたち -』関西大学博士論文 (2014) などがある。

2. 研究の目的

浮世絵師達の西洋画の解釈の仕方で最も特徴的なのは、影の消去である。当時、浮世絵は広義に西洋画のカテゴリーに入っており、極めて特殊な描画技法を使った絵との認識があったが、西洋陰影法は浮世絵の中では積極的に使用されてこなかった。もっとも、蘭学者の影響で銅版画や秋田蘭画などの洋風表現が一時期起こり、その中で西洋陰影法も取り入れられていた。しかしいずれも局所的な技法にとどまり後進に受け継がれることはなかった。浮世絵の中では、舶来の蘇州版画や西洋版画の影響を受け、歌川豊春などが模写に近い洋風表現を行った時期があり、その中で西洋陰影法も見られる作品がある。模写に近い作品には蘇州版画で使用される細かい横線の影の表現も存在する。

本研究で西洋陰影法に着目する理由は、西洋遠近法や解剖学的表現と違い、西洋陰影法が浮世絵の中で本格的に取り組みられることがなかった理由や意図的に消去した理由を調査することで、日本の絵師の観察の方法や描画表現の固有性が明らかになるのではないかと考えている。上記の先行研究は西洋画と浮世絵における陰影表現の類似性を指摘するにあたり、陰影法の中でも形に沿ってできる影 (shade) を主に扱っていた。しかしながら、浮世絵師は日本に以前から存在する隈と呼ばれる陰影法との折衷表現を行っているため、その明確な技法の違いを指摘するには地面に落ちる影 (shadow) への着眼が必要なように思われた。

3. 研究の方法

(1) 江戸中期～後期を中心にした浮世絵の資料収集と文献調査

浮世絵の影の表現を分析するために歌川国芳の絵を中心に、歌川広重、歌川派周辺、葛飾北斎とその門人の浮世絵を調査した。一次資料調査として国内外のアーカイブが公開しているデータベース・文献を主に調査し、必要に応じて所蔵機関での閲覧を行った。また、二次・三次資料調査のため文献の購入を行った。

(2) 浮世絵師が参考にしたと考えられる西洋画との比較

歌川派の祖として知られる歌川豊春は「浮絵紅毛フランカイノ湊万里鐘響図」(1770-1790頃)で、ベネチアの風景画を模写していることが先行研究で既に明らかになっていた。この絵で豊春は最も目立つ建物の影を消去している。このような例と同様に、西洋画を元にしたと考えられる浮世絵を調査し、西洋陰影法と浮世絵での陰影表現の比較分析を行った。

(3) 日本における西洋陰影法の解釈と否定について調査

浮世絵師が絵の中で使用する影の表現とともに、影に言及した記述を調査することで、影を意図的に消去した理由と、その思想背景の実証を試みた。

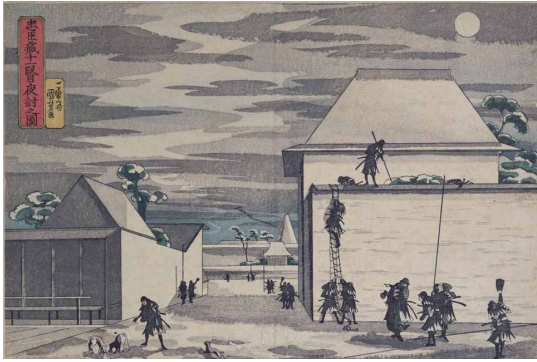
4. 研究成果

歌川豊春作品の蘇州版画の影響や西洋版画の引用などは先行研究で明らかにされているが、豊春が陰影表現を行った作品は伝歌川豊春「阿蘭陀フランスカノ伽藍之図」(1772-1789)などに見られるように、横線の模式的な影の表現にとどまっている。豊春は外国の風景や夜景を描く際に、同様の横線を描く例が散見される。鳥居清忠「新吉原大門口」(1745)などの实景に近い描写にも横線

が地面に引かれるが、こちらにも模式的なもので西洋画の影(shadow)の表現とは形容しにくい描写にとどまる。司馬江漢が「三囲景図」(1783)で江戸の实景に西洋的な影を付けるまで、浮世絵師は西洋陰影法を限の範疇でしか理解出来ていなかった可能性がある。

このような判断に迷う影の表現の時期と比較し、明らかに西洋陰影法の規則を利用した浮世絵が出現するのが、葛飾北斎「阿蘭陀画鏡」(1802)の組物や、「くだんうしがふち」(1800-1805)の頃である。北斎以降～落合芳幾の期間で、はっきりと地面に落ちる影(shadow)を浮世絵に描いた作品は、調査範囲の中で35点程度しか確認できなかった(続絵は一点扱い)。この中には組物もあるので実際に制作された枚数はある程度増えると考えられるが、浮世絵の総数の中では非常に少ない枚数であることは確実と言える。

この内、夜景や外国・異形のテーマを除くと、わずか5点程度になる。北斎「くだんうしがふち」、昇亭北寿「東都 御茶之水風景」(1804-1818)昇亭北寿「洲崎」(1810年代)、昇亭北寿「東都 両国之風景」(1830)、国芳「東都名所 かすみが関」(1830-1844)である(北斎「阿蘭陀画鏡」にはそれらしい描写も見られる)。北寿と国芳のいずれも北斎の影響下にあり、陰影表現についても同様と思われる。昼間で实景に基づく浮世絵を限定して取り上げたのは、その表現が日本の書画における隈や影法師(後述)と異なり、西洋陰影法をその思想も含めて明確に選択した根拠になり得るからである。北斎の西洋画への理解は知られており、西洋陰影法の消化についてもその先駆者と言えるだろう。



歌川国芳「忠臣蔵十一段目 夜討之図」(1831 - 1832)
東京国立博物館蔵

西洋陰影法との関係の中で頻繁に取り上げられるのが、歌川国芳「忠臣蔵十一段目 夜討之図」(1831 - 1832)であるが、ニューホフ『東西海陸紀行』(1682)の絵が利用されていることは勝盛典子氏によって明らかにされている。両図を比較すると建物の形や影の方向などもかなり参考にしていることが分かる。一方で疑問が浮かぶのが、建物の形が日本のものとは比率や意匠が違っており、当時の教養のある人物が見れば、外国の建物であることは判断できたと思われる点だ。この背景には、武家の事件を描いた忠臣蔵の芝居そのものが規制の対象であり、足利時代の見立てで上演されていた事がある。忠臣蔵の芝居が半分架空であって、その点で様々な見立てを混入させる土壤があったという可能性がある。北斎「新版浮絵忠臣蔵 初段鶴ヶ丘」(1803-05)でも、洋風表現をふんだんに使っており、歌川貞秀「忠臣蔵義士本望の図」(1840-43)でも国芳以上に西洋陰影表現が効果的に使われている。

また、討ち入りの日が満月の直前であったことも、影 (shadow) の表現の使用を使う動機になったと思われる。天保の改革によって1842年以降あからさまな洋風表現は影を潜めるが、月との組み合わせによって影 (shadow) が出現する例が散見される。広重「猿若町よるの景」(1856)が有名であり、月影のシルエットの表現として洋風のそし

りを免れたと思われる。月影のシルエットは江戸初期には「影法師」として俳諧に広がっていた。本研究で判明した浮世絵における影 (shadow) の表現された浮世絵の内、月が描かれている作品は半分に近い15点におよぶ。これらは月影と影法師が組になっていることを浮世絵師が知っており、西洋陰影法を使う上で利用したものと考えられる。国芳の弟子、落合芳幾は横顔のシルエット表現の浮世絵「真写月花の姿絵」(1867)を出版し、その後月をタイトルに冠したシルエット表現を続けたこともこれを傍証している。

浮世絵師の隈に対する言及としては、北斎が『絵本彩色通』(1848)の中で西洋陰影法について「おらんだ隈」という記述をしている。これは影 (shadow) のことではなく円形の物体の立体感を出すためのぼかしのことだが、旧来の隈との書き分けがあることが、北斎の陰影表現の理解の深さを物語っている。その他に浮世絵師の影 (shadow) に対する言及はほぼ発見できず、平行して頻繁に使われる「写真」という概念も調査した。これは現在の写実概念に近いもので国芳が「西洋画は、真の画なり。余は常にこれに倣わんと欲すれども得ず、嘆息の至りなり」と言ったというのは有名である。陰影表現に関する言及ではないが、書画の絵師・浮世絵師が言及する「写真」という概念から西洋画と浮世絵師の描画思想を調査し、「写真の概念と書画・浮世絵」という論文にまとめている。

今後、「明治～昭和初期の浮世絵・版画により創出された和洋折衷の陰影表現」(平成28 - 30年度・科学研究費若手研究(B)・研究代表者:松浦昇・研究課題番号 16K16745)において、明治以降の浮世絵・版画の陰影表現の調査を行い、本研究の成果をさらに発展させたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

(1) 松浦昇「写真の概念と書画・浮世絵」
『LOOP：映像メディア学：東京藝術大学大学院映像研究科紀要 Vol.6』左右社(2016)
pp.103-125、査読有

[学会発表](計 1件)

(1) 松浦昇「浮世絵と西洋陰影法の関係について」第18回国際浮世絵学会春季大会
2016年6月 法政大学 市ヶ谷キャンパス(東京) 査読有

[図書](計 0件)

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

特になし

6. 研究組織

(1)研究代表者

松浦 昇 (NOBORU, Matsuura)
東京藝術大学大学院・映像研究科・非常勤講師
研究者番号：80640010